



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オブライエン著 松田武雄譯「農業經濟學」
Author(s)	川村, 琢
Description	紹介
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 8, 320-322
Issue Date	1940-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/10691">https://hdl.handle.net/2115/10691</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_p320-322.pdf



ふ迄もない。殊にかゝる重大な問題を我國に於て専門的に取扱つた類書は筆者未だ寡聞にして知らないのであつて、私は著者のこの先驅的業績はこの意味に於ても高く評價されねばならぬと考へるものである。

(根岸勉治、「栽植企業方式論」叢文閣、價五圓)

オプライエン著

松田武雄譯

## 「農業經濟學」

川村 琢

「農業經濟學は、農業上の價格に關する學問」である本書はかゝる見地から第一章一般農產物價格問題、第二章個別農產物價格問題、第三章國家と農業とに分つて農業を論じてゐる。

第一章に於て著者は云ふ、農產物價格の變動は一般物價の變動と密接に對應しこの變動の主なる原因は貨幣の購買力の變動―流通貨幣數量の變化―であると。貨幣の側面はこゝでは論ぜらるべき範圍外とせられる従つて著者にとつては價格の變動は外部的に與へられたものとして、この變動が農業に及ぼす影響を問題と

する。農產物の價格の變動の影響は他の生產物に比して激烈であり、これは第一に供給の非弾力性、第二に生產過程の期間、第三に農產物の價格變動と他の價格變動との間の時差の存在にある。

供給の非弾力性は自然的原因、生産者間の非組織的狀態、市場への距離の大なることによるが、價格の變動に應じて生産を調整すべき生産要素―土地、労働(特に家族労働)―の供給の非弾力性が存する爲めでもある。生産期間の長期に涉ることも前の條件がある故にこそ價格變動の影響を大ならしめるが、更に農產物價格がその生産に必要な生產物の價格に對し時差を有することは特に農產物價格下落に際し騰貴の場合の利益以上の損失を農業に與へる。この時差も生産の非弾力性の諸條件の結果であらう。

一般的な價格變動と異つて個別商品の價格變動の原因は需要供給の狀態に基くものでありこの問題は第二章に於て論ぜられる。農產物の需要―特に食料としての―は非弾力的であり、従つてこの非弾力性は供給の變化と共に價格の變動を甚だしいものとし、この變動の程度は市場の廣さ―時間的にも空間的にも―と反比例するものである。(第一節)

供給の側面に於て見るならば(第二節)すでに一般

農産物價格の變動に見た如くに個々の農産物に於ても非彈力的なることが結論される。このことは農業に於ける景氣變動が生産の變動としてよりもむしろ收益の變動として、甚だしい場合には收益の喪失となり土地の荒廢をすら生ぜしめる。收益の變動は繼續的投下生産單位に於て費用と收量との比率の變動として所謂「報酬遞減の法則」として第三節に於て詳論せられる。

報酬遞減の「法則」によつて農業に於ては限界以上に増大せる費用に對し遞減せる收益が與へられる。販賣價格を騰貴せしむることは收益の遞減を回避する一方法であるが、農家の力の及ばぬ所であり國家の活動以外には求められさうもない。むしろ生産費の低減こそが僅かに農家に對し與へられた報酬遞減の法則の回避の方法である。

第四節はかゝる生産費の低減方法の究明にむけられてゐる。生産費の低減とは本質的には能率を高めることであり、農業に於ける困難なる費用計算の基礎の上に可能なのである。従つて收益が企業の主目的なる假定の下に能率が依存する一、農場の大きさと組織、二、土地、勞働、資本等の生産要素に對し支拂はれる價格三、之等諸要素の組合せが問題となる。

先づ農場の大きさに於て大經營と小經營の純收益に

對する優劣を論じ、どの農場にも適用せらるゝ適正な大きさは一般的には存在せず、與へられた諸條件の下で一定の農家に對する適正なる大きさが具體的にのみ存在する。この大きさは各國とも大體定まつてゐる。以上のことは農業組織に對しても生産の専門化の問題に對しても妥當するところのものである。

生産費の各要素は結局勞働費、資本費、原料費、租稅費及び市場費に分類せられる。

農業に於ける勞賃の低廉は等しく識者の認むる所である。従つて勞賃のこれ以上の低下は不可能であり、好ましくもない。唯勞働の能率増進の方法として教育、勞働者の健康の増進、有能なる勞働者の離村の防止が考へられる。更に能率賃銀制や監督指導の農業經營に於ける能率の問題を論じ、最後に機械の導入による勞働費の節約、機械の能率的使用による農村に於ける人口減少、機械の能率的使用の場合の農場の大きさ、機械の使用期間の問題が提出せられる。

勞働節約の設備即ち動力及器具の改良のための農家の資本の獲得は不利な條件にある農家に取つて必要缺くべからざるものであつて、こゝに農業に對する信用及信用機關の問題が前面にあらはれる。この完備によつてのみ農家の資本の供給が圓滑に行はれ得るのであ

原料費の低減は購買組合の結成によつて、ある程度に到達せられ得るが、租税費は農家自體その轉化の方法を取る以外には直接的には適當な方法はない様である。

生産費の一要素として地代を見ることには議論がある様であるが、契約或は慣習により一定期間固定した地代は個々の農家に對し出費を形成する。地代の意義に關しては著者は Marshall と同一見解の様である。

小作關係の生産費に對する影響を重視するが、これは生産費に直接影響を與へる諸要素に對する反應を通じて間接に生産費に作用するに過ぎぬ。

市場取引は生産過程の一部である。市場取引の機能及機關はかゝる意味に於て生産の完了のため必要であり、その費用低減は農産物聚集の機能に於て、輸送、卸賣、小賣及び危険負擔に於て考察される。更に積極的には價格低下を防ぐために市場統制、即ち市場流出の過剰の防止と現實に生じた過剰の處理の問題がある市場取引の機能に於ける費用節減の方法として市場の擴大―時間的並に空間的―が求められるべきものとしてゐる。

農業は一つの弱い産業であり、農産物價格は農家の

支配し得る範圍外の原因によつて定まる。農産物の價格引上げの方策は國家の政策にまつより外はなく、更に價格の變動に對し費用節減の方法即ち能率増進の方法に對しても國家の援助に待つこと大である。第三章國家と農業はかゝる見地に於て取り扱はれ、第一節序論第二節農業に對する國家の援助、第三節農業技術に對する國家の援助、第四節事業としての農業に對する國家の援助、第五節保護的農業政策、第六節農業への國際的協力に分つて論ぜられてゐる。

農業經濟學をば農業の技術及び事業の二方面に一般經濟學を應用せるものと定義し、更に農業經濟學を農業上の價格に關しての學問と定め、農業所得の分配論に論及しないことに關しては種々疑問がある。それはともかく我國に於ける農業は収益を目的として、價格に對應して費用節減するには餘りに非營利的であり、勤勞的であり、而も餘りに多く土地の問題にからみ合つてゐる。本書を通讀して英米の農業を想像しながら彼地に於ける企業者としての farmer が市場の相場や勞賃の騰落や、地價に氣をくばりながら収益を目あてに事務的に農業を處理して行く姿が目に見えが如くである。この程度迄にはいつの日にか吾國の農業が進みうるのであるか。